

【神奈川】1日10～12コースで1000人を在宅で診る大規模法人-篠原裕希・医療法人篠原湘南クリニック理事長に聞く◆Vol.1

2021年10月22日（金）配信 m3.com地域版

在宅医療に注力しつつ、入院医療と介護事業も行う大規模法人が藤沢市にある。医療法人篠原湘南クリニックは500人以上のスタッフを擁し、病院、クリニック、介護付有料老人ホーム、介護老人保健施設などを運営。今でいう「地域包括ケア」を目指して長く経営のかじ取りを担ってきた篠原裕希理事長は、「最初はたった4人の小さな診療所でした」と振り返る。同法人の特徴と篠原理事長が開業した理由を聞いた。（2021年8月25日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——まずは、医療法人篠原湘南クリニックの概要をお聞かせください。

当法人は、医療と介護の連携を通して地域の患者さんをトータルに支えることを目指しています。在宅医療に力を入れていることが特徴で、「入院のできる在宅医療」「医療のある介護」をテーマとしています。医療機関として在宅療養支援病院「クローバーホスピタル」とクリニック「クローバークリニック」を運営するほか、介護施設として介護付有料老人ホーム「クローバーガーデン」、介護老人保健施設「クローバーヴィラ」、「クローバーデイケアセンター」を保有し、「ひろき訪問看護ステーション」と「クローバー居宅介護支援事業所」も備えます。

2021年7月時点のスタッフ数は523人で、病院には医師常勤15人、非常勤33人、看護師87人、薬剤師5人、リハビリスタッフ（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）61人、介護士、ケアマネジャー、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士などの多職種が在籍しています。

注力する在宅医療で担当している患者さんは約1000人です。医師、看護師、救急救命士、介護士、ケアマネジャー、医療事務など38人の体制で24時間365日対応し、1日10～12コースを回っています。もう一つのポイントは地域連携室の活動で、前方支援と後方支援に分かれて入院患者さんの全件介入を目指しています。地域連携室は地域医療構想と地域包括ケアシステムを運用するに当たり、いわば車の両輪である両者をつなぐ“車軸連結棒”になります。病床平均利用率は93～94%です。

外来について、病院は専門予約外来が多く、一般外来を含めて1日の来院患者数は60～90人です。クリニックの外来は毎週火、水、金曜と隔週土曜の午前中に開いており、1日の来院患者数は10～30人です。クリニックは有料老人ホームに併設されているため、施設の入居者や職員の健康管理、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のワクチン対応も行っています。



篠原裕希理事長（クローバーホスピタル屋上で撮影）

——「入院のできる在宅医療」とは印象的なフレーズです。在宅医療を中心に据え、入院を補完的に表現していることが法人の姿勢を表しているのではないかと思います。

そうですね。一般的に病院が行う在宅医療の場合、病棟医師が兼務することが多いのですが、当法人は在宅医療がベースにあるため、ほぼ別部隊として活動しています。在宅患者さんの中には入院の必要が出てくる人もいますので、そのときに患者さんとの関係を切れさせないため、「在宅医療を推進する上での受け皿」として病院を作った経緯があります。

当法人の在宅医療の特徴は、病棟医と在宅医の相互乗り入れです。病院長も含めた病棟医が1コマ半日として週に1~3コマ訪問診療に従事しています。施設入居者を含む在宅患者さんが入院する場合は在宅主治医が病棟主治医になります。こうすることによって切れ目のない医療が提供でき、医療から介護への移行もスムーズに進みやすくなります。在宅医療の経験がある医師が病棟医を務めていると、患者さんの状態やご家族の力量を推し量って在宅復帰のタイミングも見極めやすくなります。すると、入院期間の圧縮やご家族の経済的負担の軽減にもつながります。

——先生は1988年、藤沢市片瀬にクローバークリニックの前身である「篠原湘南クリニック」を開院しました。なぜ開業しようと考えたのですか。

理由は二つあります。大学病院時代に自分よりも優秀な同期がいたこと、もう一つが自分の外来に患者さんが集まったことです。

私は1979年に昭和大学医学部を卒業した後、日本大学医学部第二外科に入局しました。当時は外科の人气が高く、故・田宮二郎さん主演の映画『白い巨塔』の影響もあり、「外科医にあらずんば医者であらず」などと公然と言われるような時代でした。1学年の10分の1以上が外科医局に入局する状況でしたが、その中に「こいつには勝てない」と思う人間がいたのです。

大学医局に入った時は、どこかで「準教授や講師くらいは目指したい」と思う気持ちがあるものです。私は手先が割と器用で、手術も下手ではない方でした。5年目くらいまではそれで良かったのですが、その同期は徹底して努力を怠りませんでした。医師になって1年目、仕事で重責を担うものがあつたわけではありませんが、慣れないことばかりで疲れはたまります。私が昼休みに当直室で寝ていたその時も彼は図書館で海外の文献などを調べていました。結果、やはり教授になりました。納得です。

一方、私は7年目になってから週に1回、外来診療を任されましたが、この時は正直混みました。内科の外来はいつも混んでいましたが、外科の外来は教授の診察日でも昼前には終わります。しかし、私の外来は昼を過ぎても患者さんが絶えませんでした。看護師も「先生の外来は混みますよね」と言っていて、「ひょっとしたらこっちの方が医師として勝負できるかな」と思ったのです。

——先生の快活な話しぶりから患者に慕われるさまが想像できます。なぜ患者が集まったと思いますか。

どうでしょう。結果的に、患者さんにとって心地の良い空間をつくれていたのかもしれない。私がいた日本大学医学部附属板橋病院は池袋に近いので、東武東上線や西武池袋線を利用して埼玉県の入間や寄居あたりから来る高齢の患者さんも多く、中には戦前派や軍隊経験者もいました。そんな人生経験豊富な人たちの話を聞くのが私は好きで、よく雑談もしていました。医師の中には病気の話だけをしてぱっと診療を切り上げる人もいますが、私は患者さんとの会話を楽しんでたんですね。患者さんと話したことはカルテに鉛筆で一言書いておき、次の診察でそのことに触れると、「あら先生、覚えていてくれたの」と喜んでくれました。

私は今でも外来と在宅それぞれの診療を行っていますが、中には開業当初からの付き合いの患者さんもいます。「先生に会いに来た」の一言は医者冥利に尽きます。

——開業場所に藤沢市を選んだ理由は。

藤沢市片瀬で有床診療所を営んでいた遠い親戚から、「医師が不在になったので引き継いでくれないか」と相談されたことがきっかけです。診療所は閉鎖してから1年以上たったので新規開業と同じ状況でしたが、先述の理由から開業医に向いているのではないかと思った私は、「よし、やってみるか」と引き受けました。私と事務1人、看護師2人の4人で始めました。

小さな診療所でしたが、「来院患者さんが1日30人に達したら箱根の日帰り温泉『天山』に行こう」とスタッフと約束したところ、1カ月目に達成し、仲良しの患者さんも連れ立って行きました。6カ月目で1日100人に達した時はまさに万歳で、2004年に病院を開設するころには200人に届く日もありました。まだ開業医が少ない時代だったからこそ実現できたことでしょう。今では1日200人はまず不可能だと思います。この時、往診する患者さんは100人ほどになっていました。



クローパークリニックの外観（法人提供）

◆篠原 裕希（しのはら・ひろき）氏

1979年昭和大学医学部卒。日本大学医学部第二外科を経て、1988年に「篠原湘南クリニック」を開院。医療と介護の連携を図ろうと1997年から2015年までにデイケアセンターや訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、介護付有料老人ホーム、介護老人保健施設を開設。注力する在宅医療の受け皿として2004年には「クローバーホスピタル」も立ち上げた。「入院のできる在宅医療」「医療のある介護」が組織運営のモットー。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

